

大学での学びと繋がり感謝

教育・昭和59年卒 尾崎 定義

入学後、受講する講義のカリキュラム編成や新入生歓迎会等が終わり少し落ち着いたころのことです。実験・観察用の化石が、研究室の裏に山積みされているのを指して、ある先輩が「何か分かる？」と訪ねられました。そしてその先輩は、次々と何の化石で、どこでとれたものかを言い当てていきました。たくさんの名称・産地を次々に言い当てていく先輩を見て、感嘆しきり。そんなことが自分にできるようになるのだろうかとちょっと不安にも思いました。しかし、後に、巡検などを通して、現地に出向いて自身で見たり聞いたり収集したりすることで、自然にたくさんの知識が身につくということを経験し、少しずつ先輩に近づけた喜びも感じたものです。またこの経験は、「子供たちの体験を大切にしたい」との願いにつながりました。

この地質的に価値のある場所をめぐる巡検は、研究室の中で年間行事の大きな軸でした。どの巡検も心に残るものでしたが、その中で印象深いものを1つ紹介します。研究室の仲間と香川大学の地質学の先生、その友人の高知大学に勤務する先生方と高知県のとある海岸を訪れたときのことです。そのあたりは、付近の浅い海が隆起して出来上がった地層であるというのが当時の定説でした。参加していた若手の学者が、これまでの定説では説明できない様々な「事実」のある場所に私たちを誘ってくださいました。また、それまでの定説を支持する初老の学者とも、侃々諤々の議論をされていました。話を聞いているだけの私も、ワクワクドキドキしたのを覚えています。教職に就いて数年後、NHKスペシャルでその時の若い学者が、日本列島の生い立ちを説明する姿が目にとまりました。さらなる証拠を見付け、発見を決定付けたのでした。あのとき私たちは、若き科学者によって、日本列島の生い立ちが明らかにされようとする、その場に立ち会っていたのです。この自分で見つけた証拠から仮説を立てそれを検証しようとするワクワクドキドキする感じを、なんとか子供たちに味わわせてやりたいとの思いは、教職人生を通したテーマともなりました。巡検は、学生が企画・計画し、教授陣も同行して指導くださるパターンが多かったように思います。泊まりがけの場合も多く、研究・食をともにし、その日の成果から様々な内容に広がり夜半まで話し合うこともよくありました。先輩、後輩とのきずなが、ここでも深まっていきました。

就職してすぐ、毎週金曜日の夜に理科の同好会が開かれていると聞き、参加するようになりました。そこで中心となって活躍されていたのが、香川大学を卒業した先輩方です。大学で直接お世話になった先輩方も多く参加されており、心強かったことを覚えています。後に後輩たちも増え、学び合いました。ここでの学びは、長い教員生活を支える大きな柱となりました。お世話になった先生方、先輩、後輩のみなさん、本当にありがとうございました。